

茂みのさなか

田中太陽

青い茂みのさなか、

つめたい目玉を隠している、瞼を踏み荒らしていった、

日差しをおれは黙認する。

セミが鳴いていて、

睡眠を返さなければならぬ。

ちつとも風いでいない茂みは、

カエルの唇が常にふやけているように、燃えている。

男にさっき押し付けられた大量の風船を、

少女はまるごと手放した。

あんた、どこか濡らしたほうがいいぜ。

白い茂みのさなか、

心筋を痺れさせている、ツバメが掠めた火の変容を見る。

塩と砂糖が似ていて、

教室が透き通ってくる、影は等しくまぶしい。

おれは肩が凝っていた、柄にもなく。

冷房がずいぶんおとなしくしている、

遠くで雲が呼吸を忘れる。

黄色い茂みのさなか、

笑いあっているのは、積極的に人を救うタイプの天使だ。

這ってくる痒さは、

夏草を刈り取ったあとの、

小学生になりたがった報いなの、かもしれない。

鎧は着ないほうがいい、

どんなに軽い素材でも、いつでも。

おれは、

泡立つせせらぎをあとにして、脱皮を急いだ、

街の外れはきつと涼しかった。

あんた、

笑ってくれ、できるだけ、

軽やかに。